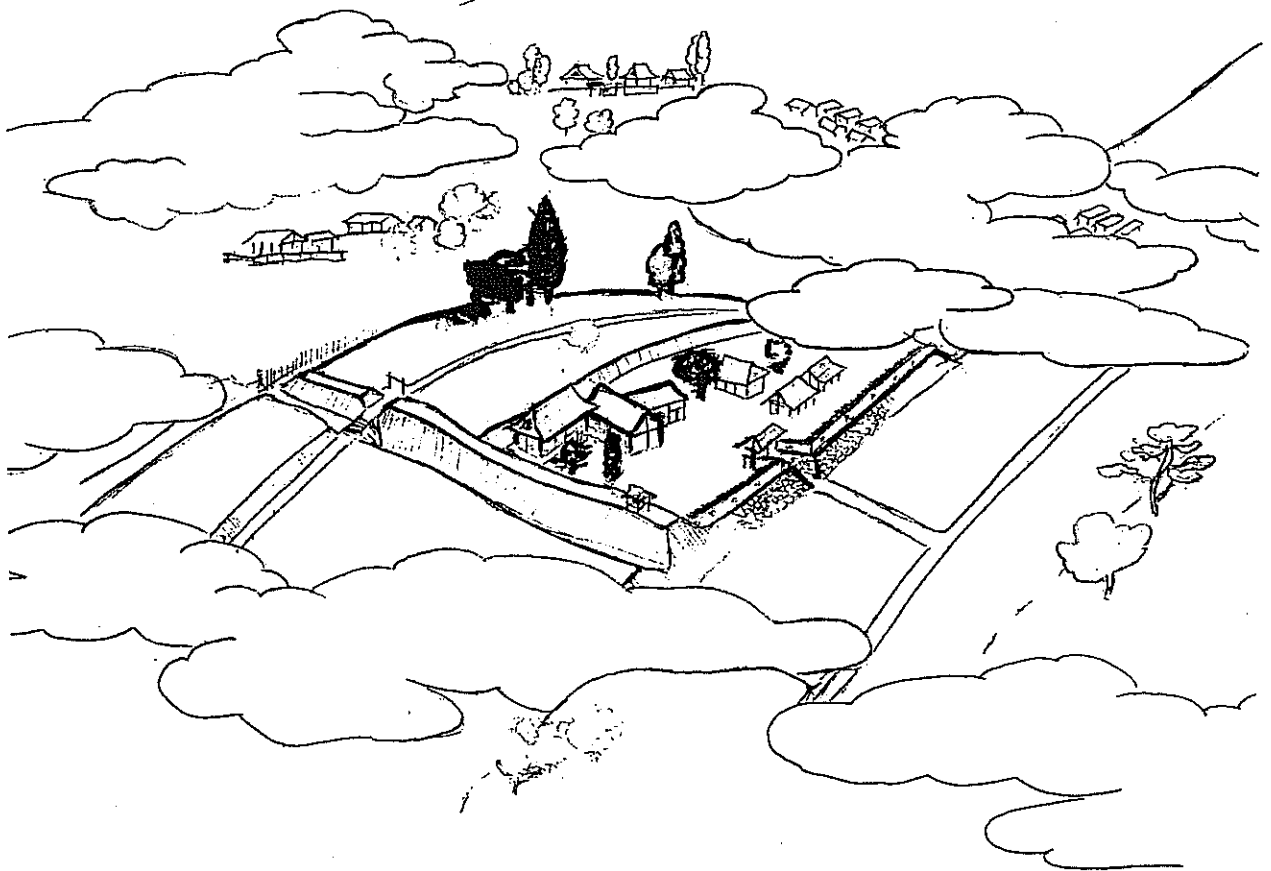


平成 18 年 5 月 27 日

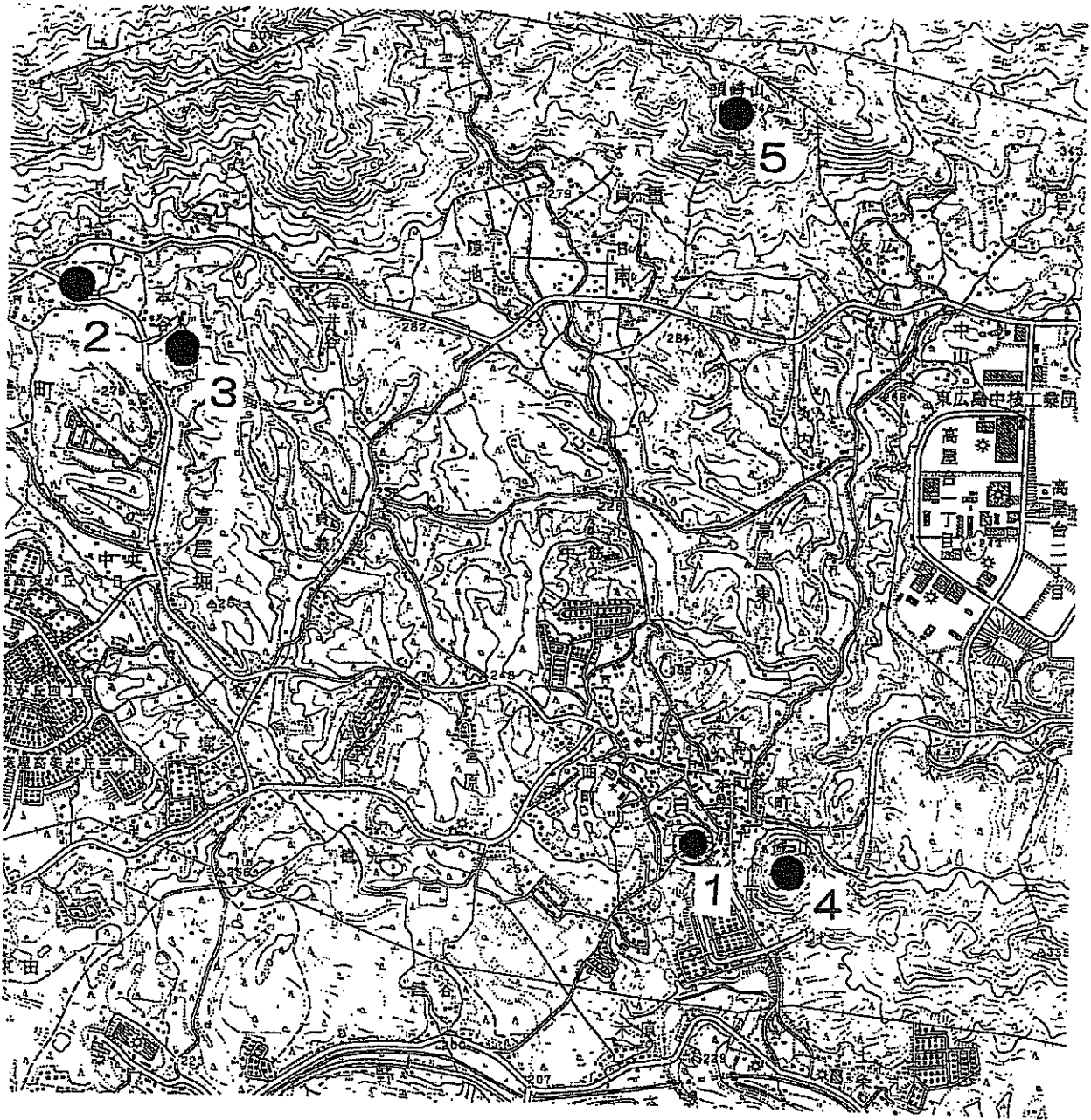
ひがしひろしましたかやちようしらいち
東広島市高屋町白市

お ど い い せ き は つ く つ ち ょ う さ け ん が く か い し り ょ う
御土居遺跡発掘調査見学会資料



財団法人東広島市教育文化振興事業団

東 広 島 市 教 育 委 員 会



御土居遺跡周辺図

S=1:25,000

おとゐ
1 御土居遺跡

ひらがし
2 平賀氏の墓地

みそのうじょう
3 御菌宇城跡

しろやまじょう
4 白山城跡

かしらぎじょう
5 頭崎城跡

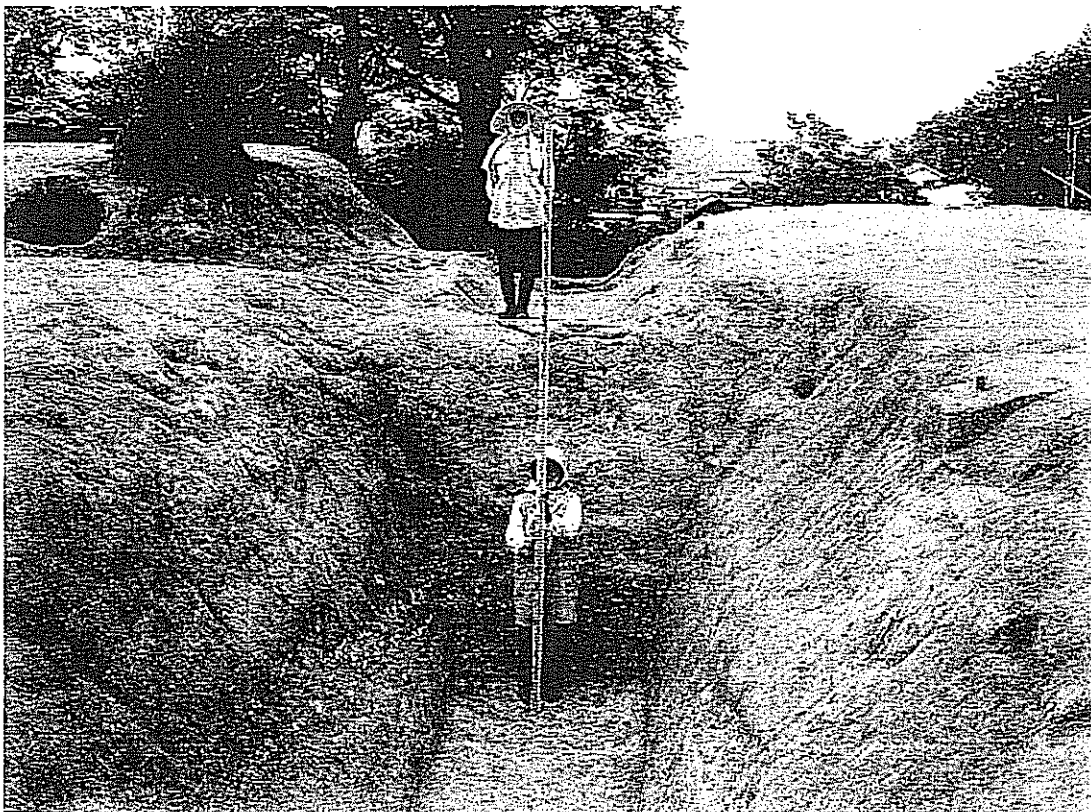
1 はじめに

財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センターでは、一般県道^{ぞうか た ま り}造賀田万里線道路改良事業に伴って、4月から2か月間の予定で御土居遺跡の発掘調査を実施しています。

御土居遺跡は、中世安芸国の有力な国人領主^{こくじんりょうしゅ}であった平賀氏の居館跡と推定されている遺跡で、平成13年から継続して調査を実施してきました。

これまでの調査で、遺跡の南側前面には、石垣があったことや鍛冶炉^{かじろ}を伴う建物跡、多くの柱穴などが見つかったほか、宴会や年中行事の際に使われたと考えられる多量の素焼きの皿や中国陶磁器が出土し、平賀氏の居館であったことがほぼ確実になるとともに、当時の様子が徐々に明らかになってきました。

今年度は、遺跡の西北端に当たる丘陵の頂部付近、約500㎡を調査し、居館の西側を区画する大規模な堀跡を検出するとともに、遺跡北側を通る道との関係から、遺跡のプランと規模をほぼ明らかにするという大きな成果を得ることができました。



堀跡と土橋状遺構

2 調査の概要

今年度の発掘調査では、御土居遺跡の西北端の施設を明らかにすることができました。

昨年度の確認調査によって、丘陵と遺跡を断ち切るための「堀切^{ほりきり}」と呼ばれる遺構の存在が推測されており、その部分を中心に約 500 m²の範囲を発掘調査しました。

中世の遺構としては、居館としての御土居と外部を区画するための堀跡、堀跡を南北に分ける土橋状遺構、土橋状遺構から城内に至る通路状遺構、防壁に当たる土塁を作り出すためと考えられる溝状遺構などを検出しました。

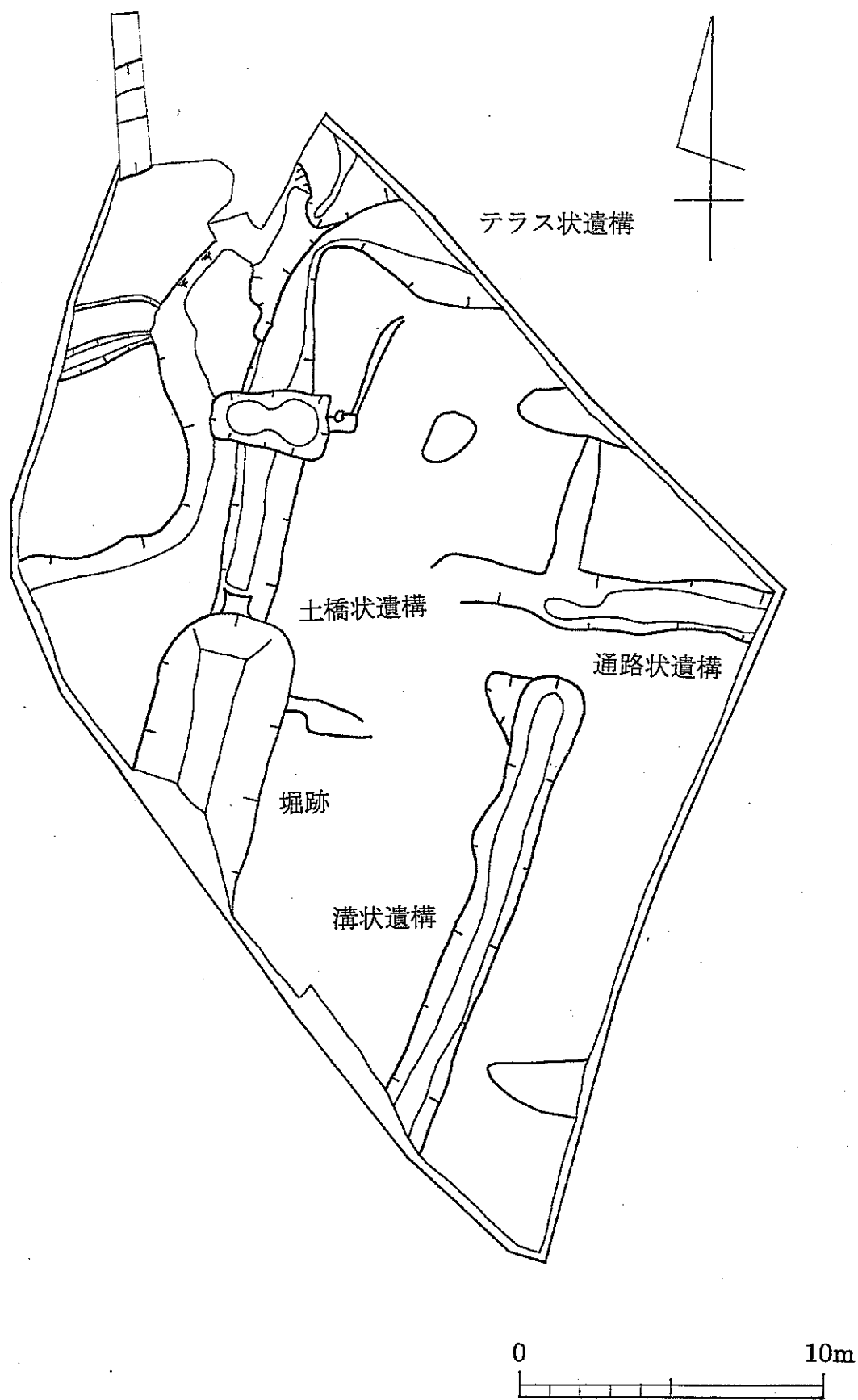
堀跡 約 20m にわたって検出しました。土橋状遺構を挟んで北側約 12m は、幅 2～3m、深さ 1～1.5m と小規模ですが、土橋状遺構から南側は、幅約 5m、深さ約 3m と、戦国時代の堀としては規模も大きく、堅固なつくりです。

北側と南側で規模が異なるのは、南側からの視線を意識したものと考えられます。南側から見れば、立派な堀が橋まで続いているので、当然、北側にも同じ規模の堀が続くと考えますから、最低限の労力で最大の効果を得ようとしたと考えられるのです。ただ、この堀は遺跡の南端まで総延長約 90m にわたって続いていたと考えられますので、その土木工事の規模はかなり大きかったと考えられます。

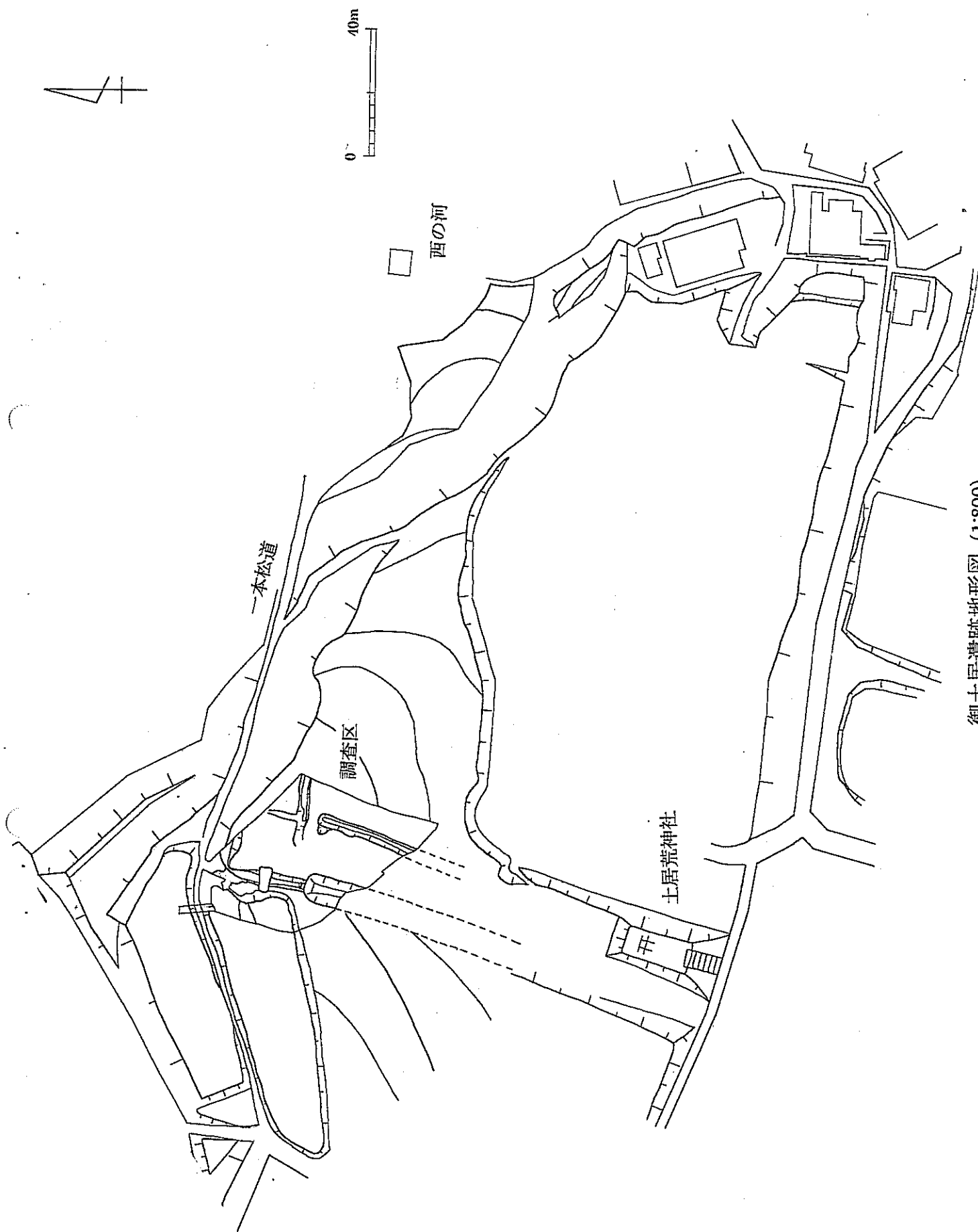
溝状遺構 堀跡の東側に平行して伸びる溝状の遺構です。幅は約 1.5m、深さは約 0.5m あります。土橋状遺構から南側の堀と基点をそろえており、堀との間約 7m を土塁とする目的で掘られたと考えられます。

通路状遺構 丘陵のほぼ頂部付近で東西に伸びる溝状の遺構です。幅約 1.5m、深さは深いところで約 30cm です。踏み固められた硬い面が何層もあり、通路として利用されたと考えられます。堀跡にかかる土橋状遺構を渡り、館内に入るための通路であったものでしょう。

テラス状遺構 堀跡は、北端で東に 90 度折れ曲がり、テラス状遺構になります。検出された規模は、幅約 1.5m、長さ約 6m ですが、遺跡北東麓から西に伸びる「一本松道」に



遺構配置図 (1:200)



御土居遺跡地形図 (1:800)

3 まとめ

今回の調査では、御土居遺跡の西側を区画する堀の規模や、遺跡北側の道（一本松道）と堀跡との角度が約 90 度になっていることが明らかになりました。

堀跡は、調査区内で約 20m の長さにわたって検出しましたが、頂部南側で検出した土橋状遺構をはさんで北側は小規模で、南側は大規模な堀になっています。これは、南側から見たとき、土橋部分の向こう側の北側についても堀があるようにさえ見えれば、やはり同様に深い堀が続いているように見えるというトリックのような構造ということが出来ます。

16 世紀後半の安芸国には、毛利氏による安定が訪れており、実戦的なものはもはや不要で、城主の威厳を保つことができれば、必要最低限の土木工事でよかったのだという合理的な精神を窺うことができるでしょう。

堀の内側に土塁があったかどうかについては、明らかにできませんでしたが、状況からは土塁があった可能性は高いと思われます。

また、堀と一本松道との角度がほぼ直角であることから、少なくとも西南北の 3 面がコの字状になり、方形を形作っていたことが明らかになりました。

一本松道は、白市の主要街路の一つ栄町の通りと平行であり、御土居遺跡の南辺とも平行です。これまで、戦国時代の白市と江戸時代の白市の関係が明らかではありませんでした。現在の白市の街路が御土居のプランを基準にして計画された可能性が高くなりました。